

研究集会

◆書跡資料調査保存の現状と課題(第3回)

1999年3月27日

1996年度から継続して行っている研究会の第3回目である。今回の報告は下記のごとくである。

(1) 文書史料としての写真撮影(富山大学 富田正弘氏) 東寺百合文書を撮影された経験に基づいて、撮影実態と問題点を報告された。基本的には、続紙、連券、紙背文書などの撮影につき奈文研の方法と共通するところが多かった。ただ後に書いたものを先に撮るという原則は、撮る順序は機械的であった方がよいのではないかと考える。

(2) 古文書伝来論と調査(京都国立博物館 湯山賢一氏) 文書伝来の形態として掛幅装の装幀で伝わるものがある。文書の装幀は卷子本を通例とするが、掛幅である文書の種類となぜその形態で伝わったかその理由についての報告であった。今後修理などに関連する問題であろう。

3回行った研究会は、忌憚のない発表が多く、意義深かったと思う。インターバルを置いて再開したい。(綾村 宏)

◆掘立柱建物はいつまで残ったかⅡ

1999年3月9日

掘立柱住居の存続下限について検討するシンポジウムの第2年度。97年度は東日本の事例が中心となったため、98年度は、西日本・沖縄における事例を検討し、また伊勢神宮の心御柱にまつわる祭祀から掘立柱の存続要因を導くため、以下の2セッションをおこなった。

1 「神社と柱の祭祀」

報告: 宇津野金彦 牟礼 仁

コメント: 丸山 茂

2 「西日本の中・近世掘立柱建物」

報告: 堀内明博 岩本正二 小野正敏

コメント: 渡辺 晶 浅川滋男

伊勢神宮の心御柱については、史料の解釈をふくめてきわめて複雑で、掘立柱存続の要因まで討論できなかった。一方、西日本の発掘事例をみると、昨年度の東日本での成果と同様、農村部の住居は18

世紀中頃まで掘立柱がかなり一般的だったことがあきらかになった。2年にわたるシンポジウムの成果は、出版物として刊行する予定である。(箱崎和久)

◆文化的景観研究会

1999年3月8日

今年度は第3回目の研究会を開催した。特に今回はサブテーマを「遺跡の『顕彰・保存・整備』～遺跡と地域社会とのかわり」と題して、遺跡と地域社会との関係に注目し、遺跡を風景としてとらえることに話題を絞った。

研究会の報告は次の通り。

羽賀祥二(名古屋大学文学部)「史蹟の発見と保護」、森山英一(城郭研究家)「士族による明治期の城郭保存運動」、田畑貞寿(千葉大学名誉教授)「モヘンジョダロの保存と整備」。

羽賀氏は近世に行われた国史や地誌の編纂を契機にして御三家等の近世大名が領内の遺跡を保存し顕彰し始めたこと等を、森山氏は近世城郭が近代になって変貌するなか士族や地域名望家たちの城郭の保存運動があったこと等を、田畑氏はモヘンジョダロ遺跡の保存上の技術的課題と生活環境や文化との関係等を、それぞれ報告した。(内田和伸)

◆官営工房研究会(第7回)

1999年2月13日

堀部猛氏(土浦市立博物館学芸員)に「地方諸国における「官営工房」をめぐる一東国の事例を手がかりとして」と題する報告をいただき、討論を行った。堀部氏の報告は二つの視点に分かれる。一つは、石母田正氏の国衛工房研究を、発掘調査によって判明した地方の生産の場の実態から再検討するという視点で、鹿の子C遺跡と武蔵国府周辺の調査成果を素材とする。もう一つは、浅香年木氏の地方官営工房研究の成果を批判的に継承し、官営工房—在地工房という対比の妥当性を検証するという視点である。

郡司層が把握していた在地の手工業生産を律令国家が掌握していく筋道は、在地のイネを律令国家が掌握していく過程とも照応する。律令国家は、必要物・必要量を在地で生産させるのではなく、在地の恒常的な生産物の一部を必要に応じて

貢納物として収奪するのであって、地方官営工房を固定的に捉えることの危険性の指摘は重要であった。(渡辺晃宏)

◆古代都市及びその近郊における土師器の生産と流通

1999年3月23～24日

今回は第一回目であるので、年代を7世紀から8世紀前半に限定し、土師器の各器種がセットとして存在することを前提とした場合、各地の土師器はどのように群別できるかについて、可能な限り出土土器にふれて検討を行った。報告者は次の通りである。文献からみた土師器の調査—古尾谷知浩、飛鳥京—相原嘉之・林部均、藤原京—西口壽生・渡邊淳子、平城京—巽淳一郎、難波宮—佐藤隆、福岡県太宰府—赤司善彦・中島恒次郎、三重県斎宮—大川勝宏、大阪南河内地方—上田睦。その結果、共通した群別基準の確定については問題を残したものの、当時の首都であった飛鳥京、藤原京、平城京では少なくとも5群の土師器が存在するのに対して、他地域の現状は精製、粗製の区分のみという、両者の対照的な状況が浮彫りとなり、今後、大消費地への土師器の供給地を解明するうえで有力な手掛かりが得られた。(川越俊一)

◆長屋王家木簡・二条大路木簡研究会

1999年1月30日

昨年度で終了した特別研究による長屋王家木簡検討会を継承し、今年度から所内科研で研究会を発足させた。今回は島根県教育庁の2人に報告をお願いした。

平石充「長屋王家の御田・御圃」は長屋王家木簡を通して、王家の御田・御圃の経営内容を分析した報告で、耕営労働力の編成に集団的請負労働があったこと、御田からの米の収取方式は令制官田のそれと類似していることなどを指摘。野々村安浩「隠伎国木簡について」は、長屋王家・二条大路木簡に大量に含まれる隠伎国からの荷札木簡を取り上げ、郷・里の現地比定とウジの分布の分析などを行い、郷の立地に2つのタイプがあること、年を違えた同一人物とみられる人の荷札があることなどを明らかにした。参加者21名。

また長屋王家木簡の釈読検討会を、堀池春峰・鬼頭清明・岩本次郎・東野治之氏

に依頼し1998年10月13日に行った。

(館野和己)

◆飛鳥時代における造瓦技術の変遷と伝播 — 飛鳥時代の瓦づくり (第2回) —

1998年8月8～9日

「斑鳩寺・四天王寺の創建瓦と高句麗系軒丸瓦」をテーマとした研究集会を開き、以下のような成果を得た。

①斑鳩寺の軒瓦を、瓦当文様と製作技法から飛鳥時代前・中・後期の3時期に区分する案を提出し、大和や山背、河内などの同系統の軒瓦との対比を行った。その結果、斑鳩寺編年案がほぼ妥当であり、これらの工人母体は飛鳥寺の造営に関わった星組にあったとの推論も出た。

②飛鳥時代初期のいわゆる高句麗系軒丸瓦について、大和、山背、河内、三河の代表例を取り上げ、瓦当文様と製作技法の比較を行った。その結果、多くは610年から630年までの間に位置付けられるとの結論を得た。また、瓦当文様は高句麗というより新羅に起源があるのではとの見解も出た。

③軒平瓦は、我国では斑鳩寺の手彫忍冬文が初現(610～620年)。この類例はソウル近辺でも出土しているとの発表があった。重弧文軒平瓦は、639年から造営が始まった百済大寺が初出だが、四天王寺や平隆寺では、二重弧文が先行する可能性が示された。次回の検討課題の一つである。

前回と同様に、飛鳥諸寺をはじめ各地の瓦を展示した。実物を見ながらの議論は好評であり、成果も大きかった。

(毛利光俊彦)

◆「伝統的建造物における住まい方の研究」 研究集会

1999年2月19日

研究集会では、文化財関係者・研究者・国行政担当者・地方行政担当者・民家再生設計者がそれぞれの立場から、伝統的建造物に住むことに対する現状と問題点を発表した。発表は、「文化財としての建造物保存」、「文化財としての町並み保存」、「伝建地区住民の住まいに対する意識調査の結果」、「住宅として修復した伝統的建造物の実例」、「伝建地区における住まいの実態」、「民家再生の実態」、「文化財的保存と再生」の7題であった。以

上の発表をふまえ、参加者全員による討論を行った。討論内容は多岐にわたり、今回まとまりある結論は得られなかったが、今後とも各方面とも横のつながりをもって情報交換や議論を続けて行くことで意見の一致を見た。

(島田敏男)

◆金属製資料の材質の歴史の変遷に関する研究

1998年7月21日

金属製歴史資料の材質の歴史の変遷を科学的な調査で明らかにすることを目的とした。今年度は古代から近世にわたって法隆寺に伝世する銅製容器に対して、考古学的編年観と、科学的調査による編年観を比較検討した。検討にあたっては、実際の資料を考古学及び工芸史的観点から研究している研究者と、科学的手法によって調査している研究者の双方による討論という形式をとった。研究会の構成は以下の通り。毛利光俊彦(奈文研)「法隆寺に伝世する銅製容器に対する考古学的編年観」、村上隆(奈文研)「法隆寺に伝世する銅製容器の科学的調査」。それぞれの発表に続いて、加島勝(東京国立博物館)と成瀬正和(正倉院事務所)からコメントが述べられた。なお、研究会の最後には村上隆をコーディネーターとし、発表者に加えて金子啓明(東京国立博物館)、内藤栄(奈良国立博物館)、関根俊一(帝塚山短期大学)らの各氏による総合討議が行われた。

(村上 隆)

◆古代豪族居宅の構造と類型

1998年12月14～15日

郡司屋・在地首長・村落首長・郷長・富豪層など、在地「豪族」諸階層の居宅の構造上の特徴や階層性などを探ることを目的とした研究集会で、考古学・文献史学の研究者96人の参加を得た。各地方における「豪族」居宅遺跡の事例報告と類型化、居宅の空間構成的特徴と官衙・集落との比較検討、文献史料から見た居宅の構造や豪族による在地支配の特質などについて7本の報告をし、討議した。その結果、「豪族」居宅は総体としては集落と官衙との中間的形態をとる、空間的構成の点では居住空間と物資収納空間とからなる、居宅の敷地面積や建物配置などの点に居宅としての特徴や階層差が反映されている、などの点が明確にされた。ま

た一方、研究者間における「豪族」概念の違いも浮彫りになり、豪族居宅遺跡の指標を明確化する基礎的作業や地域論的観点から居宅遺跡としての特徴を抽出する作業、集落論との総合的検討の必要性などが改めて確認された。

(山中敏史)

◆保存科学研究集会—有機質遺物の材質調査—

1999年2月2日

有機質遺物の材質・構造・劣化などに関する研究は、測定装置の進歩につれて新しい研究成果が得られつつある。今回は木材・漆・琥珀・繊維そしてDNA分析などについての現状とその問題点を中心に研究発表を行った。出土木材に関しては従来から行われてきたマクロ的な研究からよりミクロ的な研究が進められ、保存処理の諸問題解決に期待される。また、漆・琥珀・繊維に関しては、多くの出土品での同定が可能になり、さらに産地等に関する新たな研究が展開しつつあり、総合的なデータベースの構築が必要となる。DNA分析に関しては、出土遺物の遺存状態に大きく左右されることと、分析試料の量的な問題が残されているが、今後大きな成果が期待された。

(肥塚隆保)

◆遺跡地図情報システムの研究

1999年2月26日

考古学における地理情報システム(GIS)の応用は、GIS自体の隆盛からすると立ち後れている。本年度も昨年度に引きつづき、研究会を開催し、実際の市販されているGISソフトを利用した事例について主に業者の側から発表をいただいた。発表は、測地成果2000といった新しい動向に関するもの、GISシステムに取り込むための画像データを効率的に採取したり加工したりする手法に関するもの、遺跡情報管理のための道具という視点でGISの活用を図るものにわけることができる。

研究用に種々の解析を行うシステムよりは、行政的な遺跡情報の管理に適したシステムの開発が市場では先行しているように感じられる。市町村程度の面積や遺跡数のデータを取り扱う技術は成熟してきている。今後はより大規模なシステムについて検討していかなければならないであろう。

(森本晋)